

[追手門学院大学社会学部芸術文化事業]

映画上映会 & トークセッション

風景の

変容

2024年1月6日±
12:30-16:00

12:00 開場 | 12:30 上映 | 14:45 トークセッション



Photo: "Transmission" © Harun Farocki, 2007



ハルーン・ファロッキ《Transmission》(2007年)

原田裕規《Waiting for》(2021年)

鈴木光《Mr. S&DORAEMON》(2012年)

追手門学院大学社会学部社会文化デザインコース学生制作作品

会場 | 茨木市福祉文化会館(オークシアター)
・ 5F文化ホール(上映会)
3F302号室(トークセッション)

参加費 | 無料

※事前申込必要

主催 | 追手門学院大学社会学部

共催 | 茨木市、公益財団法人茨木市文化振興財団

協力 | 追手門学院大学社会学部社会文化デザインコース

企画・コーディネイト | 松谷容作

テクニカル・アドバイザー | 林勇氣・澤田華

映写技師 | 中川允子

舞台設営 | 毎日舞台

宣伝美術 | 見増勇介、関屋晶子 (ym design)



風景の変容

強烈な自然災害、戦争、また大規模な都市開発などは、私たちの生活の風景を一変させ、そこに根付いていた記憶を剥ぎ取っていきます。そうしたことで人々は大きな心理的ダメージや心象の変化を被ることになります。今年度の追手門学院大学社会学部芸術文化事業では、4本の映像作品の上映とトークセッションを通じて、こうした「風景の変化」や「記憶」、「心の変容」などについて考えていきます。

トークセッション

鈴木光 Hikaru Suzuki

1984年福島県会津若松市生まれ。現在東京藝術大学映像研究科博士後期課程に在籍中。映像作品を制作している。作品の制作方法やキーワードは、エッセイフィルム・シネマヴェリテ・作家映画・日記映画・ドキュメンタリーの中のフィクション・アート。過去の代表作に「Mr.S & Doraemon」「God and Father and Me」「安楽島」「Garden」などがある。これまで参加した映像映画祭は、Experimental Film Culture in Japan、山形国際ドキュメンタリー映画祭、恵比寿映像祭、福島映像祭など。その他、コラボレーション作品に、「BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW Omnibus」がある。



田坂博子 Hiroko Tasaka 東京都写真美術館学芸員

東京都生まれ。主な企画に「高谷史郎 明るい部屋」(2013-14)、「アビチャップン・ウィーラセタクン 亡霊たち」(2016-17)、「エクスパンデッド・シネマ再考」展(2017)、「エクスパンデッド・シネマ再考」(2017)、「エキソニモ UN-DEAD-LINK」(2020)、「風景論以後」(2023)など。2009年より恵比寿映像祭を担当。

原田裕規 Yuki Harada

社会のなかで広く認知されている視覚文化をモチーフに、人間の身体・認知・感情的な限界に挑みながら、現代における「風景」が立ち上がるビューポイントを模索している。バブル期に一世を風靡したラッセン、日本でオカルトブームを牽引した心靈写真、オープンワールドゲームなどに用いられるCGIに着目しながら、実写映像、パフォーマンス、CGI、キュレーション、書籍など、多岐にわたる表現活動を行っている。主な個展に「Waiting for」(金沢21世紀美術館、2021年)、「One Million Seeings」(KEN NAKAHASHI、2019年)などがある。



Photo: Kaori Nishida

松谷容作(司会) Yosaku Matsutani

追手門学院大学社会学部教授、Ph.D(神戸大学)。専門は美学・芸術学、映像メディア論、視覚文化研究。感性論的転回以降のアート実践、アートと科学技術また環境との関係、様々な生物や事物に共通する感性のあり方などを研究している。著作として『クリティカル・ワードメディア論』(共著、2021年、フィルムアート社)、『スクリーン・スタディーズ』(共著、2019年、東京大学出版会)などがある。

申し込み期間|11月13日~12月15日

参加希望者が多い場合は抽選になります。抽選結果は12月20日にお伝えします。キャンセルや社会状況等に応じて追加当選ないし再募集することがあります

申し込み方法|

専用申し込みフォームからお申し込みください。

<https://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/shimin/bunka/event/62281.html>



問い合わせ先|茨木市文化振興課 072-620-1810(9:00-17:00)

会場アクセス情報|茨木市福祉文化会館文化

(オークシアター3Fおよび5F)

〒567-0888茨木市駅前四丁目7番55号 Tel:072-623-3962

JR茨木駅から東へ徒歩8分、阪急茨木市駅から西へ徒歩9分



Photo: "Transmission" © Harun Farocki, 2007

ハルーン・ファロッキ《Transmission》

ハルーン・ファロッキは石に刻まれた記憶の場所を主題として取り上げている。この作品が検証するのは世界中に点在する記念碑が持つ人びとを引きつける力と崇拝のあり方である。そうした記念碑はこれまで巡礼者や観光客の目的地であったし、いまや個人的な記憶から精神の啓蒙また宗教的感情まで広い範囲のさまざまなニーズを満たす役割を果たしている。ファロッキの旅は、ベトナム戦争で戦死した58249人のアメリカ人全員の名前が刻まれた黒い花崗岩の壁であるワシントンのベトナム戦争戦没者慰霊碑から始まる。毎日何千人もの人びとがここを訪れ、文字に触れ、家族や友人の名前をなぞりながら、自らの生と過去とのつながりを作ろうとしている。…〔中略〕…石は、過去の生や出来事の集合的記憶に永遠性をあたえ、そして崇拝の対象となる素材である。また同時に、何千人もの訪問者の記憶は擦り減った石の形跡の中に保存されるのである。(Anita Beckers) ハルーン・ファロッキのHP(<https://www.harunfarocki.de/home.html>)より抜粋

原田裕規《Waiting for》(2021年)

本作は、ゲーム製作などに使用されるCGI(Computer-generated imagery)の技術を用いてつくられた、CGアニメーション/ナレーション・パフォーマンス作品である。100万年前、あるいは100万年後の地球をイメージして生成された3つの空間は、オープンワールドゲームのようにどこまでも広がり、その中を仮想のカメラがあてどなく彷徨っている。そこに響きわたるのは、作家自身が33時間19分にわたって朗読し続けた、地球上に現存する全ての動物の名前である。人から見た特徴や地名などによって構成される動物の俗名は、それ自体が人と自然の関係性を伝える「箱舟」のような存在だ。ここではないどこか(=彼岸)を思わせる世界に没入しながら、この地球(=此岸)に存在する生き物の名前をいつまでも呼び続けるという行為は、あの世とこの世の間にある新たな「風景」を立ち上がらせている。

鈴木光《Mr. S&DORAEMON》(2012年)

2011年3月11日(金曜日)に東日本大震災と津波が発生し、その次の日から、私は自分の日常を撮り始めました。震災前から、自分の日常を日記的に撮ることに興味を持ってはいましたが、特に撮影する意味を感じれず撮ることはしていませんでした。しかし、震災が起きたことで、目の前の日常が突然重要な意味を持って、自分の目の前に姿を現し始めたように思いました。その自分の身の回りの日記的な撮影自体は、その年の6月まで続けていたように思います。この作品ができるもう一つの要因となったのは、私の古い作品で、日本を代表するアニメ『ドラえもん』の主人公が住む家だけのフッターを集めて構成したものがああります。この作品が、その時、この未曾有の事態をある意味では象徴するもののように思えました。そのため、この『Mr.S & Doraemon』という作品では、私の日常的な記録映像のフッターと、アニメ『ドラえもん』の家だけを集めたフッターを合わせてみようと考えました。その二つの構成でこの作品は成り立っています。

追手門学院大学社会学部社会文化デザインコース 学生制作作品(2023年)

授業科目「コミュニケーション表現特論」の受講生が茨木の「風景の変化」や「記憶」、「心の変容」について取り組んで制作した映像作品。